

史傳  
津崎矩子



下村三四吉

余は、去年六月の本誌上より、明治維新前に於

ける福岡の女丈夫野村望東尼の傳をものし、數月に亘りて完結を告げき。蓋し、嘉永六年米艦渡來

して和親通商を請ひしより、内外の多事言ふべからず、混亂紛争の状、恰も風怒り濤立つの概あり

しが終に一大新天地は豁然として開かれ、以て今日の盛世を見るに至れり。この間の歴史は實に我國に於ける無前の偉觀にして、これを世界に求むるも、殆どその比なるべし。この時に當り、國

民の志氣旺然として振興し、その最高潮に達せしも宜なりけり。望東尼の如きは、婦人界に於けるこの氣象の一代表者なり。而して、望東尼と相比すべきもの、更に二人あり。その一人は京都の津崎矩子にして、他の一人は常陸の黒澤登幾子なり。

京都を中心として、一は西國に在り、一は關東に出でたり、亦奇とすべし。この三人の事蹟は、その曲折もとより各々同じからずといへども、勵王の志に至りては則ち一なり。既に望東尼を傳したる上は、他の二人とも説かざるべからず。よりて、こゝには、先づ津崎矩子の事蹟を述べ、然る後残れる一人に及び、余が記述の本意を始終せんと欲す。

望東尼の傳中に於いて、津崎矩子の事蹟の一部は、既に説きたり。望東尼の傳を読みたる方々は

その文久元年の上京中、津崎村岡の幽居たる直指庵を訪問し、

雲井にも、君が名たかく、聞えけり。

したひくる身をあはれとも見よ(望東尼)  
はるばると尋ねし君のめぐみをも、

しづこころなく、わはでくるしき(津崎村岡)

との贈答せりしことを記憶せらるゝならん。この

津崎村岡は即ち矩子にして、矩子はその幼時より

の本名、村岡は近衛家の老女としての名なりしな

り。村岡の名の高く雲井まで聞えたりしは、いかなる事蹟によれるか。本傳にて説かんとする主要部はここに存せり。

矩子は、大覺寺宮の家士津崎元矩の女にて、天明六年、京都の西郊なる上嵯峨村に生れたり。天明の年號を聞けば、直に田沼意次父子の幕府に於

ける專權を連想し来るべし。迷惑の年と呼ばれたる明和九年は、安永元年と改元せられたれど、この以前よりの田沼父子の專横は改まることなきのみならず、却てます／＼その勢を加へたり。されば、幕府の政治甚しく腐敗し賄賂は公に行はれ奢侈柔弱の弊風は滔々として全社會に波及し、加ふるに、安永より天明にかけて、大風、洪水、噴火、地震等の變異屢々發して、人々安き心とては

なかりき。尊王の情熱燃ゆるが如き高山彦九郎が「ひざ觀山に紙旗推し立てん、千人の義兵あらば、堅子を倒さんは目前に在り」と絶叫し、陰に幕府を滅ぼさん企圖をなししも、この頃なりけり。

勢は窮まりて又變す。天明六年即ち矩子が生れし同年に徳川十代の將軍家治薨し、その遺意によりて田沼意次は、老中の職を奪はれ、且つ封を削

られ、「飛ぶ鳥をも落す」といはれし勢威は、一場の夢と化し去りぬ。田沼が悪政の後を承けて、白河の城主松平定信は、心を盡して十一代將軍家齊を輔佐し、所謂寛政の治、美を享保の治に比するに至り、天下の面目再び一新せり。

寛政五年、定信は職を辭しけるが、矩子はこの年始めて近衛家に仕へたり。時に年八歳なりき。彼が勤王の事に與れる生涯はここに始まれり。正に是れ、千古の卓見を以て海防の説を立てたる憂國家林子平が仙臺の幽居に病死し、高山彦九郎が九州にて自殺したるとも同年なり。

矩子が仕へたる近衛家は藤原忠通の長子基實に出て、九條、二條、一條、鷹司の四家と共に五攝臣中の最も重要な位地を占めたり、近衛家の當

時の主公は基前といひしが文政三年、年三十八歳にして、早く薨せられ

近衛基前の薨前十二年、即ち文化五年に子忠熙公誕生ありて、ここに至りて、後を嗣がれぬ。忠熙公誕生の頃は、矩子が該家に事へたるより十五年を経たれば、忠熙公の保育輔導につきて、矩子が與れることは少なからざりしならん。矩子は、事理にさとく、雄健の氣象さへありしが、温良謙讓の美德を具へ、つゆほこりたるさまなく、事を處するに縝密にして、同家の上下のものに厚く尊敬せられきといへば、尤もかかる任務に適當せる人といふべし。

ヴィクトリヤ女皇傳(つゝき)

鄭越生補譯  
兎も角もギリアム四世の即位によりて、女皇は